

二〇二五年度

トキワ松学園中学校入学試験

国語第一回

問題用紙

受験番号

開始と同時に受験番号を
書き入れなさい。

線①～⑩の漢字は読み方をひらがなで答え、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 元氣げんきいっばいいっばいの明あ朗らうな人だ。
- ② 町の人口の推お移しををググララフフで表す。
- ③ 著しよ名なな芸げい術じゆつ家かの作さく品ひんををかかざざる。
- ④ 会かい長ちやう就しゆ任にんを祝いわうをパパーーテティィーーががあある。
- ⑤ 水みづ不ふ足そくで干かん害がいにに見みままわわれる。
- ⑥ 大だい臣しんの身み辺へんをケけイいゴごする。
- ⑦ 火か気きゲげンんキンきんの注ちゆ意い書しよききががあある。
- ⑧ 旅りょ行ぎやう先せんでキきチちヨよウうな経けい験げんををすする。
- ⑨ テてスすトとに備びええててタイたいサさクくする。
- ⑩ テてーープぷをマまいいてて枝えだを固かんん定ていする。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問いの下の数字は本文での行数を示します。)

めぐるちゃんとはお昼まえにわかれて、午後からはおばあちゃんと図書館に行った。

公園へ行く坂道を反対にくだっていくと、道沿いには田んぼが広がっている。

車から見たときは緑一色のじゅうたんって感じだったけど、そのときよりも、ほんのり黄色っぽくなっているような気がした。さあつと風が吹くと、長くのびた稲が波うった。おばあちゃんは「あら、いい風ねえ」とうれしそうにつぶやいた。今にも実りだしそうな、こ¹うばしいにおいが鼻を通りぬける。

おばあちゃんは「近道」といって、田んぼと田んぼのあいだのあぜ道をずんずん歩いていった。アスファルトの道よりもすずしくて、踏^ふんだときの感^{かん}触^{しゆく}が、やわらかい。遠くのほうで作業しているだれかが、「おーい」と手をふつてくれる。おばあちゃんも元気に手をあげる。

①「それにしても、ずっと公園で野球するか、高校野球を観^みるかだったのに、急にどうしたの？ 図書館に行きたいなんて。」

あ、野球の本でも借りるの？」

「ちがうよー。そんなに野球ばっかやってるかなあ、おれ」

おばあちゃんは、まじめな顔で（あ）うなずいた。

それは、まあそうかもしれない。でも、今日の目当ては、ほんとうに野球じゃない。海だ。②おれは、海に関する本を

さがしに来たんだ。

14

13

12

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

めぐるちゃんのいう、おれだけの海。それを考えるためには、もつと海について、いろいろ知らなくちゃいけないよ
うな気がした。それに、めぐるちゃんに水族館の話をしたとき、名前や種類、色やかたちをあんまり覚えていない魚も、
けっこういることに気づいて、それをちゃんと確認したくなったのだ。

③ 田んぼにかこまれた道をぬけると、車が走る大通りに出て、そこからすぐのところ^③に図書館があった。

横に長い、コンクリートの箱みたいな見たための図書館に入った瞬間^{しゅんかん}、ほてった体が一気に冷えた。クーラーがよくき
いていて、寒いくらいだ。

おれは一階の児童図書室に行き、おばあちゃんは二階へあがっていった。

② 図鑑^{ずかん}のコーナーで本をさがしていたら、すぐそばでなにかが動く気配がして、それから腕^{うで}を（ い ）つかまれ
た。もうちょっとで声をあげるところだったけど、なんとかこらえた。

つかまれているところを見おろすと、まだ小学校にあがらないくらいの小さな女の子が、おれの腕にしがみついてい
た。

その子はふっと顔をあげたかと思うと、目を丸くして「まちがえた！」といった。そして、だだっとかけていった。
その先には、女の子よりも少し大きい、でもおれよりは年下っぽい男の子がいた。女の子はその子を「おにいちゃん」
と呼び、おれのほうをふりかえると、にひっと笑った。前歯のぬけた満面の笑み。④ おれも、つられて笑った。

ひととおり本を集めたおれは、窓辺の席にすわり、まずは魚の図鑑をひらいた。

マダラトビエイやマイワシ、あとハリセンボンやハコフグとかは、すぐに「これこれ」ってわかったけれど、タイや

ハタになつてくると、どれが水族館にいたのか、まったく見当がつかなかった。じっくり観察したつもりだったんだけど。
しま模様の魚がいたな。

夕焼け色の魚も。

紫色の水玉が、横に点々とならんでいる魚もいた。

手あたりしだいにページをめくり、たよりのない記憶をたどる。

水族館ではあまり気にならなかつた灰色の魚も、よく見るとそれぞれぜんぜんちがう顔つきや体の特徴があつて、おもしろい。

魚からしたら、人間もみんな同じような顔に見えたりするのかな。

凶鑑の魚たちは、ほとんど左のほうを向いている。

なんでだろう。水族館では、どうだったっけ。おれ、右側の表情、見ていたかな。

うん、見ていた。右に向かつて泳いでいた。

たまに、正面を向いている魚もいた紙の上の魚たちを、頭のなかで動かしてみる。

⑥ ふく。ふく。ふく。

たくさんのあぶくが、おれのまわりで生まれては消えていく。

青く光る水槽のなかを、魚たちが（う）泳いでいく。

おれはガラスに張りついて、ひれのふるえや、鼻の穴のふくらみや、うるこのきらめきをじっと観察した。いつまで

46

45

44

43

42

41

40

39

38

37

36

35

34

33

32

31

も見ていられる気がした。

急に、むにゅつとくちびるをつままれる。

「トモル。口開いてるよ」

そのまま横を向くと、おかしそうな顔をしたお母さんと目が合った。ほんやり開けっぱなしのおれの口を、お母さん^⑧はいつもそうやって、ペンギンのくちばしみたいにする。はずかしいので、「やめてよ、もう」と首をぶんぶんふると、お母さんは小さな笑い声を立てた。

「お母さんたち、ちよつと休憩きゅうけいね。トモルは、ゆつくり見ててね」

おれがこくんとうなずくと、お母さんは後ろにある、壁かべぎわのソファにすわった。おれはふたたび、目の前の大きな水槽をながめた。

ずっとそうしていると、もしかして自分のほうが水槽のなかにいるんじゃないかって思えてくる。ガラスの向こうの、魚たちがいる世界のほうが、もっとずっと広くて、もしかしたら、本物の海なんじゃないかって。

「ほんとうに、そうかもしれないわよ」

心のなかでいったつもりだったのに、返事が来たのでおどろいた。

すぐとなりには、めぐるちゃんが当然のように立っている。そして、おれと同じように、大きな水槽をじいっとながめている。そのまっ黒なひとみには、ガラスの向こうの世界が映りこみ、（え）きらめいている。

「おれ、口に出してた？」

62

61

60

59

58

57

56

55

54

53

52

51

50

49

48

47

「口に出してたつていうか、思いつきり話しかけてきたんじゃない。わたしに」

めぐるちゃんは、³「げげんそうに首をかしげた。おれも、「そうだっけ?」と首をかしげる。

なにかをたしかめるようにふりかえると、お母さんがおれたちのほうを見ていて、そしてにこにこ手をつた。そこにお父さんがやってきて、お母さんのとなりにこしかけた。やつぱりこつちを見て、にっこり笑いかけてくる。

おれは手をふりかえして、それからまためぐるちゃんのほうを向いた。でも、めぐるちゃんはいなかった。

「めぐるちゃん?」

そのとき、こんこんとガラスをたたく音が聞こえた。おれは魚がぶつかつたのか、それとも飼育員さんがなにかパフォーマンスを始めるのかと思って、音のするほうへと向きなおつた。そして、⁴「あんぐりと口を開けた。

めぐるちゃんが、水槽のなかに入っている。そして、ピースサイン。

「めぐるちゃん!だめだよ、水槽のなかに入っちゃ」

あわてて声をかけるけど、めぐるちゃんは平気な顔をしている。

「なにいつてんの。あんただつて、もうこつちにいるじゃないの」

あつと思うまもなかった。暗い影^{かげ}が落ちてきて、見あげたら、マダラトビエイが頭の上を通過していくところだった。

おれの口から、（お　　）大きな泡^{あわ}があふれでた。でも息ができるし、ぜんぜん水のなかつて感じがしない。

「そりゃあんた、魚だつて、自分が水のなかにいるって思いながら生きていないわよ」

「そうなの?」

78

77

76

75

74

73

72

71

70

69

68

67

66

65

64

63

「トモルも、陸の上にいるって思いながら生きてるわけじゃないでしょ？」

「えー、でも、土の上にいるときは土の上にいるって思うし、アスファルトの上にいるときは、アスファルトの上にいるって思うよ」

めぐるちゃんは早くもめんどろになってきたのか、「もう、しゃべってないで泳ぎなさいよ。ここは水のなかなんだから」と、今度は背泳ぎを始めた。まわりの魚たちに負けないぐらい、しなやかでなめらかな移動だ。あんまりきれいな泳ぎかただから、めぐるちゃんの脚が魚の尾おに変わっていかないか、ちよつと心配になった。

めぐるちゃんの後を、ハリセンボンやハコフグ、まだ種名があやふやなタイやハタ、そして名前のわからないたくさんの魚たちが追いかける。めぐるちゃんは、⁵さしずめその大将ってとこだ。

⁹めぐるちゃん軍団がつつこんでいくと、マイワシの大群はふた手に分かれて、ゆつくりとまたひとつのかたまりにもどった。

はつとして、おれはその後に続いた。ほとんど泳げないはずなのに、今は、最初から泳ぎかたを知っていたかのように、すすいと進んでいける。息ができるし、目も開けられる。水の抵抗ていこうも、まったく感じない。

¹⁰魚どころか、水そのものになってしまったみたい。そのぐらい心地こころよかった。

果てのない水のなかを、めぐるちゃんと魚たち、それとおれは、どこまでもつき進んでいった。やっぱり、こっちは本物の海で、おれがさっきまでいた場所のほうが、水槽だったんだ。後ろをふりむくと、ガラスの向こうの、はるか遠くにお母さんとお父さんの影が見えた。

めぐるちゃんのもとには、いつのまにか、ミズクラゲやアザラシにオットセイ、ウミガメ、おまけにペンギンたちまでがわらわらと大集合していた。めぐるちゃんは追いついてきたおれに気づくと、

「トモル、あんたはショートね。そっちに回って」

と指令を出して、グローブを投げてきた。水のなかなのに、グローブはいきおいよく飛んできて、おれの顔面に当たった。

どうやらめぐるちゃんがピッチャーで、キャッチャーはミズクラゲ、一番バッターはペンギンらしい。だけど、それ以外はだれがどのポジションにいるのか、だれが味方でだれが敵なのか、ぜんぜんわからなかった。とりあえずオットセイが、気合いを入れて、ばんばんと手をたたく。

「よっしゃ、気張っていくわよ」

めぐるちゃんが大きくふりかぶる。脚を高く上げる。ダイナミックな投球フォームだ。ボールはすごい速さで、ミズクラゲめがけて飛んでいく。

そういえば、ミズクラゲのやつ、キャッチャーミットをはめていない。あ、そうか。自分の体がミットってことね。

ペンギンは、意外と鋭い目つきでいきおいよくバットをふって、だけどボールはそのわずか下をすりぬけて……………。

「あー、おひるねしてるー！」

暗闇を切りさく、明るくて大きな声。おれの目はくつついてしまったのか、なかなか開かない。

どうにか顔をあげて、目をぎゅつとつぶってから、ぱちぱちとまばたきしてみる。ぼやあつとした視界が、だんだんはつきりしてきた。

110

109

108

107

106

105

104

103

102

101

100

99

98

97

96

95

さっきの女の子が、いたずらっぽい笑みを浮かべて、おれの顔をのぞきこんでいる。目が合うと、女の子は「きゃあー」とさげびながら、「おにいちゃん」のほうへ逃げていった。

まだぼうっとしておれに、「ごめんなさいね、うるさくして」と女の子が声をかけてきた。たぶん、あのふたりのお母さんだ。眉⑪を下げて、こまったようにほほえんでいる。

本棚ほんだなの近くできゃっきゃとはしゃぐ女の子を、「おにいちゃん」がなだめている。

おれはその様子をほんやりながめながら、頭⑫の片隅かたすみにまだ残っている海のかげらを、なるべく大きくさん拾いあつめようとしていた。

117 116 115 114 113 112 111

(出典 戸部寧子「トモルの海」)

問一 〜〜線1〜5の言葉の本文中での意味として最もふさわしいものを、それぞれ下のア〜エの中から一つ選んで、

記号で答えなさい。(5、35、64、70、86)

1 こうばしい (5)

- ア 青々とした草のような
- イ 新鮮しんぜんで甘い果物のような
- ウ 秋の実りを感じさせるような
- エ しっとりとしめった土のような

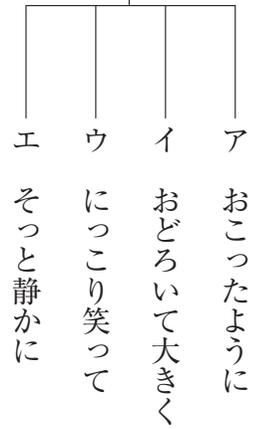
2 たよらない (35)

- ア あてにならない
- イ 正確な
- ウ 古い
- エ 豊富な

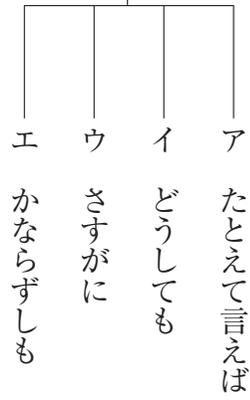
3 げんそうに (64)

- ア うれしそうに
- イ 不満そうに
- ウ 不思議そうに
- エ 楽しそうに

4 あんぐりと (70)



5 さしずめ (86)



問二 (あ) (お) に入れるのにふさわしい言葉を、次のア～カの中からそれぞれ一つ選んで、記号で答え

なさい。(12、22、45、61、76)

ア ゆらゆらと イ ごぼつと ウ がしつと エ うんうんと

オ につこりと カ ゆうゆうと

問三 —— 線① 「それにしても、ずっと公園で野球するか、高校野球を観るかだったのに、急にどうしたの？ 図書館

に行きたいなんて」とありますが、おばあちゃんはトモルの行動にどのような気持ちを示していますか。最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。(9)

ア おばあちゃんは、トモルの行動にびっくりして、どうしてそうしたのか聞いている。

イ おばあちゃんは、トモルが変わったことに不満で、その気持ちをはっきりと伝えている。

ウ おばあちゃんは、トモルが決めたことを応援おうえんしていて、元気づけている。

エ おばあちゃんは、トモルになぜそうしたのかただ聞いているだけで、特に気持ちを表していない。

問四 —— 線② 「おれは、海に関する本をさがしに来たんだ」とありますが、その理由を四十字以内で説明しなさい。

い。「。」をふくみます(13・14)

問五 —— 線③ 「田んぼにかこまれた道をぬける」とありますが、「かこまれた」という言葉を使わずに、意味を保

ちながら書きかえたものとして適切なものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。(18)

ア 田んぼがある道をぬける

イ 田んぼが所々に見える道をぬける

ウ 田んぼが周りに広がる道をぬける

エ 田んぼを通り過ぎる道をぬける

問六 —— 線④ 「おれも、つられて笑った」とありますが、「つられて笑った」のはなぜですか。その理由としてふ

さわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。(28)

ア 女の子がおもしろいことを言ったから。

イ 女の子の笑顔に引き込まれたから。

ウ 女の子がまちがえてあわてる様子がおかしかったから。

エ 女の子が前歯のぬけた笑顔を見せたから。

問七 —— 線⑤「水族館ではあまり気にならなかった灰色の魚も、よく見るとそれぞれぜんぜんちがう顔つきや体の

特徴があつて、おもしろい」とありますが、ここで主人公が感じたこととして最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。(36・37)

ア 灰色の魚が同じ種類であることに気づき、その共通点がおもしろいと感じた。

イ 灰色の魚にもそれぞれ個性があり、そのちがいがおもしろいと感じた。

ウ 灰色の魚があざやかな色の魚よりも目立たないことが、かえつておもしろいと感じた。

エ 水族館で見た灰色の魚と図鑑の魚が異なっており、その差がおもしろいと感じた。

問八 —— 線⑥「ぶくぶくぶく」とありますが、これは何を表していますか、文章中の言葉をつかつて、二十五字以

内で答えなさい。「」。「」をふくみます(43)

問九 —— 線⑦「いつまでも見ていられる気がした」とありますが、このように主人公が感じた理由を三十字以内で

説明しなさい。「」。「」をふくみます(46・47)

問十 —— 線⑧「お母さんはいつもそうやって、ペンギンのくちばしみたいにする」とありますが、お母さんは何のためにそのようなことをするのですか、説明しなさい。(50・51)

問十一 —— 線⑨「めぐるちゃん軍団」とありますが、それは何を指していますか。本文中から五十字以内でぬき出し、初めと終わりの五字を答えなさい。(87)

問十二 —— 線⑩「魚どころか、水そのものになってしまったみたい」とありますが、これはどのような意味ですか。

最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。(91)

- ア 主人公は魚になりたいと強く願っており、自分が本当に魚に変身したかのように感じている。
- イ 主人公は水そのものになったような気持ちになり、自由に泳げて心地よく感じている。
- ウ 主人公は水の冷たさを強く感じていて、体が冷え切って水になってしまいそうだと感じている。
- エ 主人公は水の中で方向を見失い、自分がどこにいるのかわからなくなって不安を感じている。

問十三 —— 線⑪「眉まゆを下げて、こまったようにほほえんでいる」とありますが、このときの女の人の気持ちとして

最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。(114)

ア 子どもたちが迷子まいごになり、落ち着かずにあせっている。

イ 子どもたちが他人に迷惑めいわくをかけてしまい、申し訳なく思っている。

ウ 子どもたちが思いがけない行動をして、どうすればいいかなやんでいる。

エ 子どもたちが言うことを聞かず、手を焼いてあきらめ気味になっている。

問十四 —— 線⑫「頭の片隅にまだ残っている海のかげらを、なるべくたくさん拾いあつめようとしていた」とあ

りますが、このときの主人公の気持ちとして最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。(116・117)

ア 楽しかった夢の内容を忘れないように、思い出を心にとめておきたいと思っている。

イ もう一度海に行って、現実の海で同じ体験をしたいと強く願っている。

ウ 夢の世界が心地よく、現実に戻りたくないと感じており、目を覚ましたくないと思っている。

エ 海の生き物たちと直接話してみたいと考え、その方法を真剣けんに探している。

問十五 本文の内容と合っているものを次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア トモルは、おばあちゃんに図書館へ行く理由として「海についての本を探したい」と話していたが、心はどこかでは野球の本も気になっており、実際に図書館で野球の本を借りようか迷っている。

イ 図鑑コーナーでトモルの腕を急につかんだのは、まだ小学生になっていない小さな女の子であり、彼女はおばあちゃんと図書館に来ていたが、トモルを自分の兄と思い込んでしまった様子である。

ウ 図鑑をめくりながら、トモルは水族館で見た魚たちがほとんど左向きにえがかれていることに気づき、興味を持って持っている。そして、水族館で魚がどちらを向いて泳いでいたかも回想している。

エ 図書館での読書の途中で、トモルは海の本を読みながらうとうとし始め、げんそう 幻想的な夢の中で水槽にいる魚たちと一緒に泳いでいるような不思議な感覚に浸っていたところ、お母さんに肩をたたかれて目を覚ます。

オ 図鑑で確認した魚たちのページには、ペンギンがキャッチャーとして魚たちと共に水槽の中でプレーする場面がえがかれており、ミズクラゲがバッテリーとして登場している。魚たちも、試合を楽しんでいるようだ。

